

# 確かな今

栗田好子

眠っている

あたたかな闇に抱かれて

母の匂いを追っている

赤ん坊の甘酸っぱい乳の匂い

待ちわびた姉の安堵の横顔

小さな命の誕生

くすぐる姉に

少し迷惑そうに

思わず誘い出される微笑み

やわらかな産毛が 朝日を受けて

一日の始まりを 確かめあっている

抱きあげた手に押しつめられる未来の重み

光に促されて

動きだそうとする手足は

音もなくやさしい

微笑んでいる

赤ん坊の夢の中

たくさん言葉と たくさん季節が

胸をあつくして

今か 今かと

君の参加を 待ちわびている

# 冬の化石

栗田好子

うすら寒い夕ぐれ

今日を終えた枯葉の吹き寄せる波

秋の終りの予感を抱いて

ずっと昔から病みつづける心

底の明るさの中では 無心を装っても

夜の暗さの中では 身を縮め震えながら

点滴のように流れ打つ

時計の音を数える

我が子が居る時は

振りむかぬ夢を

びつちりと身にまとうけれど

所詮

わたしの夢は ポツンと置かれた

使う人のいない灰皿

出ない煙を吸いながら

身を縮め 病み続ける心

波打つ緊張と 不安の中

いよいよ逃げ場のない時がくると

胃の中の食物が反乱し

痛みは氷となって

私の何もかもを 固めてしまう

歩きだそうとする

その時

虚像のわたしさえ ばらばらと崩れる

助けての声は 逃げ場を失い

孤独の予感 は かき集められる事もない

今日も 変わらない憂鬱が

グルグルと揺れまどう

家の中 静寂の中

# いぎぶり

栗田好子

夜がくると

「不眠症」という餌をくわえて 床にはいる

羊が一匹 羊が二匹 三匹 四匹

いやいや明日の朝は

一 味噌汁のそうめんを湯搔いて

二 ごみを捨てて ついでに流しを洗って

三 布団を干そう

でも雨が降るかな 降らないかな

羊が百匹にならないうちに

しっかりと眼が冴えちやってさ

朝がくると

子供のいなくなった古巢で目覚める

ぎこちない手足をバタバタと動かして

ご主人様の食事を作る

日に焼けた真っ黒な体に風を切って

バイクにまたがり仕事に向かう

職場で 人をかじりまくってさ

夕方になると

洗濯物を片付けて

カーテンを引き 今日的光に幕を閉じる

お風呂に水を入れる

ありきたりの作業に心はいれぬ

古ぼけた体では ささえきれなくなった

古巣のための役割を 背負ってる

電話も音を消した古巣で 家中 ぐそぐそと

何を捜してか動きまわる 雑食の私

動きを止めたら

古巣の割れ目に

ぱっくりと落ちてしまいそうです